

富本憲吉(1886-1963)は、人間国宝、文化勲章受章者であり、本学の前身である京都市立美術大学で教授、学長を務め、陶磁器専攻科を創設した近代を代表する陶芸家である。富本の陶磁器に対する造形的思考は現代陶芸に一貫するものであり、その影響を受けた陶磁器関係者は多岐に渡る。2012年度末に富本憲吉記念館所蔵の資料558点の寄贈を受けたことに引き続き、2014年4月に資料の追加寄贈を受けた。

寄贈資料にはその思考の原点であるバーナード・リーチとの交換書簡や渡英時の書簡やその他の書簡、書籍などがある。その資料から富本の造形的思考の源泉を明らかにし、近代・現代工芸における西洋的造形思想と日本的工芸の関係性を探求することが本研究の目的である。

立命館大学アート・リサーチセンターが管理運営している「近現代陶磁器資料データベース」(<http://www.dh-jac.net/db1/mjci/index.php>)において、昨年度は翻刻作業を行なった。今年度は、利用者の利便性をより向上させるために翻訳作業を随時行なっている。

また、この「近現代陶磁器資料データベース」に私と前崎信也研究員が参加して制作した「宮永東山窯陶磁器データベース」を追加する作業を行なった。宮永東山窯は、明治42年に開窯し、昭和40年代まで活動してきた京都を代表する工房である。また、共同の登り窯で生産し、問屋を通して流通させる事が主流であった京都において、単独で登り窯を所有し、東京の直売店で販売する独自の形態で作品を生産していた。そのような宮永東山窯には荒川豊蔵を始め多くの陶芸家が集まってきた。富本もその一人である。「宮永東山窯陶磁器データベース」は2009年から開始した、宮永東山家所蔵の明治末~昭和40年代までの図案、工房作品約3000点の悉皆調査を基盤とし、調査結果を2011年のサントリー文化財団研究助成で「失われゆく技術」「失われゆく言葉」「失われゆく制度」の3つの観点からとりまとめてデータベース化したものである。このデータベースでは、一般的な作品資料データである名称、制作者、制作年代、印・署名などの採取と、1作品につき平均6点の画像を基礎データとしてデータを採取した。この基礎データに技術欄と器種分類を追加してデータベース制作を行なった。このデータベースの特徴は、名称に反映されない「技術分類」「器種分類」の分類項目を設けたことである。「宮永東山窯陶磁器データベース」は2017年4月を目処に公開予定である。「近現代陶磁器資料データベース」にさまざまな陶磁器資料が集まることにより、富本と同時代に京都においてどのような陶磁器が製造されていたかが明らかになり、富本が目指した陶芸との関係が見えてくる。

その他、前崎研究員による砥部焼の調査を行なった。この調査は、前崎研究員が手がける Google Cultural Institute 上の「Made in Japan: 日本の匠」(<https://www.google.com/culturalinstitute/beta/project/made-in-japan?hl=ja>)の一貫として行なわれ、多くの富本資料を調査する事ができた。富本と砥部焼との関係は、富本が砥部の白い磁土に興味を持ったのがきっかけである。富本は試験場の隣にあった組合の作業場を使って白磁の仕事をした。その他に、量産された皿に絵付けを行なったり、富本デザインの商品化など砥部焼の近代化を後押しした。富本がデザインした商品は現在も生産されている。

また、富本が京都市立美術大学(現京都市立芸術大学)の着任に際し、教科書として執筆した未定稿の著書である『わが陶器造り』の出版作業は、デザインをすでに終えており、現在最終段階の校正を行なっている。